

福井県指導農業士



事例のポイント・要約

- ボカシとEM（有用微生物）を主に活用して土づくりを行う
- 自然観察により草の性質をよく研究・観察しながら除草機を使わないで年間を通したほ場管理や耕種方法によって対応している
- 次世代の若者の行える農業を常に考えている

1. はじめに

60年あまり米を作るのではなく米を実らせる稲作りに取り組んでこられた。福井県の有機農業の第一人者として行政や教育関係者から依頼を受け日夜後継者の指導に取り組んでおられる。農業技術は長年の自然観察をとおして稲が育つ生育環境づくり、稲と雑草との共生する田んぼにするにはどうすればよいかを学び今日の耕種概要に至っている。EMは嫌気性微生物の中でも使いやすく平成3年に導入された。

有機JAS認証制度にもいち早く取り組み（財）自然農法国際研究開発センターで認定を受けた。消費者と生産者とが信頼関係が築けるような販売体制を確立し消費者に安全で安心できる今摺り米などを提供している。

2. 経営の概況

水田の全耕作面積230aを有機栽培している。労働力は中川さんと家族が休日などを利用して手伝っている。

3. 栽培圃場の概要

1) 圃場の立地と周囲の地形

福井県福井市は、九頭竜、足羽、日野の三大河川の扇状地である福井平野に発達してきました。河川活動によって形成されたといわれる沖積平野で、弥生時代には、既に、農耕も可能な平野になっていたといわれています。

2) 栽培条件

水利はパイプラインが完備されており給排水が分離した成形ほ場で1枚が30a～50aに整備されている。

3) 圃場の課題と育土の方向

ほ場は米ぬかやEM、EMボカシを中心に栽培し、自家製資材だけ使用し土づくりを行っている。

EMボカシも元肥用には質よりも量を重点に置き、穂肥などの追肥用には窒素成分を補うように工夫している。



視察者に丁寧に説明

4. 具体的な栽培技術

1) 耕起～作付けの準備

稲藁は全量還元し、稲刈り後はEMボカシの散布を耕起後に行う。その後に雑草抑制のためにドライブローで耕起を行う。代掻き時にEM米糠ボカシを散布する。田植え時にEM活性液を側条施肥付き田植え機械で施用する。その後はEM活性液を定期的には場の水口から流し込みを行う。

2) 播種・育苗～定植

種籾は自家採種行っているが自家採種を継続すると品種の表示を指摘される場合があるので更新を行っている。種籾は温湯処理を行い、播種後は発芽機を利用しビニールハウスで育苗している。

育苗期間中にEM活性液を散布している。床土は山の腐葉土を主体に自家製EMボカシを混ぜEM活性液で発酵した物を使用している。

3) 播種・定植後の初期の管理

田植えは5月上旬に行う。水管理は水位が下がったら入水を行っている。6月以降は深水管理を行っている。

4) 雑草対策

雑草のやる気の出さない管理方法を取り入れている。ほ場にあった様々なマルチを行う事に努めている。特に表層に有機物密度の高い状態を作ること、下層を攪拌しないように努めている。



5) 中間～後期の管理

水は切らさないように深水管理を行う。追肥は原則として行わないが、草丈と葉色を見て必要な場合は穂肥としてEMボカシを施用している。

6) 病害虫の管理と対策

特に病害虫対策としての取り組みは行っていないが定期的にEM活性液の流し込みが健康に生育し結果的に病害虫抑制効果を出していると考えている。

5. 今後の課題や取り組みたいこと

有機栽培の根本は「食べてくださる消費者への配慮の気持ちを継続していくことが大事である」と、そして「有機農業は支えてくれる人たちのおかげで成り立っている。感謝の気持ちを大切に、消費者との架け橋に成りたい」さらに「有機農業は、一部試しにやってみるものではなく、継続して実践し点から面への拡大が環境問題も含めて大事な事である」と取り組んでおられます。

平成 22 年度より始まったEM研究所の技術提携農家としてEM研究所と共にEM活用技術向上を目指した取り組みも行っている。

参考資料

2) 土壌微生物多様性・活性分析

平成 22 年 11 月に中央農業総合研究センターで土壌微生物多様性・活性分析を行った。

全国 7000 箇所を上回る日本の土壌の平均値を著しく上回る微生物の豊かな土壌であると評価を戴いた。この数値は非常に希な結果で新潟県の朱鷺や、兵庫県のコウノトリといった希少鳥類をブランドシンボルにしている野生生物の保護、自然環境の涵養に地区を上げて努力している産地も上回る結果であった。